

第5回滋賀県総合教育会議 会議録

1 日時

平成27年11月6日（金） 14：00～16：00

2 場所

滋賀県庁北新館5-A会議室

3 出席者

三日月知事、藤田委員長、土井委員、河上委員、佐藤委員、宇野委員、河原教育長

【事務方】福永商工観光労働部部長、勝身健康医療福祉部理事、水上教育次長、川上教育次長、浅見管理監、佐藤教育総務課長、望月企画室長（司会）、安藤特別支援教育室長、辻本教職員課長、岩谷学校教育課長、佐敷学校教育課主席参事、梅本生徒指導・いじめ対策支援室長、藤堂人権教育課長、山崎生涯学習課長、中井スポーツ健康課長、森井子ども・青少年局副局長、東商工政策課長（教育総務課）河井企画員、菊池主幹、廣沢教育企画主事、高田主任主事（学校支援課）武田主幹、磯田主査、木部指導主事、的場指導主事（学校教育課）西川主幹、中村主幹、臼井主査、村田主査

【有識者】キャノン マシナリー株式会社 専務取締役経営管理センター所長
菊次 正純 氏
株式会社市川農場 代表取締役 市川 健治 氏
県立野洲養護学校校長 重森 恵津子 氏

4 開会

司 会

それでは定刻となりましたので、ただいまから「第5回滋賀県総合教育会議」を開催いたします。本日は、皆様お忙しい中お集まりいただき、ありがとうございます。配布資料については、お手元の次第のとおりです。

本日の会議は、「本県における特別支援教育」および「本県における職業人（産業人材）の育成」をテーマに議論をしていきたいと考えております。最初の特別支援教育のテーマでは、本日は学校現場から野洲養護学校の重森恵津子校長にお越しいただいております。学校現場の状況も伺いながら議論をしていきたいと思っております。

後半の「職業人（産業人材）の育成」のテーマでは、本日は株式会社キヤノンマシナリー様から菊次様に、また、株式会社市川農場から市川様にお越しいただいております。後程、議論に入る際に改めてご紹介させていただきます。それでは本日の会議をはじめたいと思っております。

また、本日は試行的に動画も撮らせていただいております。ご了承ください。それでは開会に当たりまして、知事から一言ご挨拶をいただきたいと思っております。

三日月知事

皆様こんにちは。本日もそれぞれにお忙しい中ありがとうございます。また、この会議だけではなく、現場の視察や色々なご提言、ご指導をいただいておりますことを改めて御礼申し上げます。

毎回この総合教育会議は楽しみにしております。様々な現場の課題を伺ったり、また、教育現場と社会のつながりについて様々な角度からご示唆をいただき、それを施策に反映するために教育委員会の皆様と侃々諤々議論する、非常に大事にしています。本日も限られた時間ではありますがよろしく願いいたします。

また、今日は午前中に、近畿のPTAの会議があり、約2,000人の方にお集まりいただき開催されております。びわ湖ホールが満席で、近畿からお父さんお母さんにお集まりいただき、まあ熱く、PTAとしてどうするのか。また、親としてどうするのか。子どもがどうだろうか。学校がどうあるべきだろうかという議論をしていただきました。心強いなと感じましたね。みんなでPTAの歌を1番から4番まで一生懸命歌ってましたよ。そしてお父さんお母さんも一生懸命学ぼうと、こういうことが非常に印象的な言葉でした。ややもすると、教育というと上から目線になってしまったり、子どものことを考えると大人はちょっと高い

ところから見てしまいがちですけれども、一緒になって考える、一緒になって取り組むという姿勢をこれからも滋賀県では大事にしていきたいと思いますので、本日も特別支援教育、そして産業人材の育成についてしっかりと一緒に考えていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

司 会

ありがとうございました。そして本日の題字は草津養護学校の生徒に書いていただきました。知事あてにお手紙をいただいておりますので、ここで少し紹介させていただきます。

「この題字を作成させていただくにあたって、高等部の3年生の生徒4人が担当いただいたということで、その生徒は日ごろから落ち着きがなく、次から次へと興味に移り、最後まで物事になかなか取り組めない生徒でしたが、この時ばかりは、あのテレビに出ている三日月知事が見てくれるといったことで期待感を持ち、楽しんで、長時間ではありましたが1字1字集中して書き上げることが出来ました。担当の教師も驚いておりました。生徒も他の人のためにやることは無駄なことは何一つなく、すべて勉強ということが理解できたと思います。」ということで感想をいただいております。こういったことが励みになればいいなと我々も考えているところです。また、前垂れについては甲良養護学校の生徒に作っていただいたものを再びつけさせていただいております。

それでは最初に「本県における特別支援教育について」のテーマで議論を始めたいと思います。まずは事務局から本県の特別支援教育の現状と課題等について簡単にご説明いただけますでしょうか。

5 本県の特別支援教育について

特別支援教育室長

(資料1に基づき説明)

司 会

ありがとうございました。県の現状や課題、取組状況等についてご説明いただきましたが、学校現場の現状等についても、現場で日々子どもと接しておられる重森校長の方から簡単にご説明いただけたらと思います。

重 森 校 長

失礼いたします。重森です。滋賀県で採用していただいて以来、ずっと特別支援教育に関わらせていただいております。私は今、野洲養護学校に勤務しておりますので、知的障害、肢体不自由の学校の状況を中心にお伝えさせていただきたいと思います。

先の説明にもありましたように、やはり子どもたちは増えております。ただ、増えている子どもたちの中で質の変化、多様化が随分起こってきたなと実感しています。障害の重度重複化ということと言われるのですけれども、私の感覚から言わせていただければ、障害が確かに重度になってきています。生きていく上で、学校生活を送るために医療と離れることのできない医療的ケアが必要な子どもたちもおり、それで重度化している一方で、子どもたちの中には知的障害は軽度であっても、社会性・対人関係において困難性を示している子どもたちも増えてきているなということを感じております。すべての子どもというわけではないのですけれども、具体的な一例としましては、他校の事例ですけれども、小学部の子どもが、教室から飛び出していくという状況がたくさんあって、落ち着きのない子だなと見ていましたが、その子に一度検査してみようということで検査してみたら、実は、勉強がわからなくて教室から飛び出しているのではなくて、認識が十分にある中で、養護学校の授業がわかっていて、入学してきたときは落ち着きの無さに注目していたが、実際には知的障害の程度が重度でなく、知的好奇心がもてずに教室から出ていくという状況があったということです。実は、子どもの実態・課題より勉強内容が簡単すぎて、興味が持てなかったということでもあったように聞いています。

それから、高等部の入学生がかなり多いということもありましたが、地域の中学校から入学してくる子が多い状況です。その中には、やはり

中学校の段階で学校に行きにくい状況で不登校状態を呈していた子どもたちがいます。ただ、養護学校に入ったということで、学校生活の楽しさを実感して、安定した登校によって、教師や友達へ心を開けたり、学びへの意欲につながってきた子もいます。ただ、学校生活が安定してくると、養護学校に通うことに一生懸命の時はよかったのですが、やっぱり物足りなさ、勉強の物足りなさを感じてくる子もいます。そういう子を見た時に、特別支援学校に通ったことは、この子たちにとってどうなのかなということを感じます。それから、子どもたちだけではなくて、保護者の皆さんの意識の変化が随分進んだなと感じています。私が35年ほど前に教職に就いた時には、養護学校に通うことを選択するということは、なかなか勇気がいったという保護者さんが多かったのですけれども、今の保護者さんの中には、地域の学校よりも養護学校で学ばせたいという強い思いを持つ方もおられます。中には、こちらは私たちの責任かなとも思ったケースがあります。平成25年の9月に、インクルーシブ教育システムの構築ということで、就学の手続等が変わってきました。その中で、一定程度の障害のある子、具体的には、特別支援学校で学ぶ程度の子どもたちに対して、原則、特別支援学校となっていたものを市町教育委員会の総合的判断によって、小中学校で学ぶことが可能となって、一定程度の障害の重い子どもたちに対する就学先の選択肢が増えたわけなのですけれども、保護者の中には、本来、地域で学べる子なのですが、養護学校への入学を前提に見学とか、相談を希望されましたが、特別支援学校で学ぶ障害の程度ではないとお断りしますと、それによって混乱が生じてしまったケースがありました。やはり、特別支援学校は他の校種と比較したら、障害の重い子どもたちが学ぶ場で、その就学に対する考え方に大きな変更があったということを丁寧に説明を、広く徹底していく必要があるなということを感じました。そういうことを感じている時に、11月、12月号の「滋賀プラスワン」の中に、障害がある子どもとない子どもが共に学び合う教育ということを大きく見開きで取り上げていただいたということは、本当にありがたいなと、うれしく思いました。

あと、今、入り口と学校で学んでいる子どもたちのことをご説明しましたが、社会への出口となる高等部のことをちょっとご説明いたします。やはり高等部でも、先ほど申し上げましたように、質の変化、多様化があって、これまでの高等部の中での対応では難しくなっていて、教育課

程の大きな見直しが必要だなということで感じていました。そのような時に、今年度、県指定の高等部を中心とした3つの研究がありまして、それを受けたことが、学校の、高等部の中身を変えるよいきっかけになったなということでありがたく感じております。具体的には企業様の知見を活かした学校教育活動をとというプログラムがあり、企業の方たちと学校が一緒に話す場があり、お互いを知る良い機会ができあがっています。話し合いの中で企業の方から、学校に実際訪問して、学校はこうやっていることがわかったけれども、企業の様子も見てくださいと言ってくださいました。そこで高等部の教員を中心に20名ほどが近くの企業に行き、企業の状況を見せていただきました。そんな中で、企業さんの求めることとか、企業サイドの安全への徹底した考え方ですとかを知ることが出来ました。それから、障害のある者もない者も共に働き、共に暮らすという理念をきちんと提示していただく中で、うちの卒業生も、ものすごく自然な形で受け入れていただいております、感謝しております。卒業生に当たり前のように関わってくださっているということがすごく感じられて、ありがたいなと思いました。あわせて、学校の中だけでは気が付かないことを教えていただくよい機会となりました。学校のこれまでを見直し、目の前の子どもたちにとって、何が必要かということを検討するよいきっかけにしていきたいと思っています。ただ、そういったすごくよい企業ばかりではなくて、企業によっては、やはり障害者雇用に向けての温度差が随分あるというふうに聞いております。それから、やはり特別支援学校の中だけでは、子どもたちを成長させられない部分もありますし、子どもたちにとっては実体験ですとか、実習がものすごく大切な場面ですが、実習先がなかなか見つからなくて、困っている学校があるように聞いています。私たちの特別支援学校ですと、一斉に子どもたちを実習に出すということではなくて、柔軟に教育活動の中で、時期を見つけて、実習に行ってもらっているのですけれども、高等養護学校は、カリキュラムの中で一斉に現場実習に出るという状況がありますことから、一時期にたくさんの実習先を見つけなければいけないということで、かなり担当の方がご苦労されているということを聞いています。

それから、こういったことが現状ですけれども、野洲養護学校に勤務してみて、すごく感じたことがあります。本校の保護者のことですけれども、保護者のみなさんは子どもたちのために、学校がより元気になっ

てくれたらよいなということで、すごく頑張ってくださいしています。ちょっとしたことなのですけれど、夏だったら玄関に大きな七夕飾りを作ってくれて、子どもたちがどういったことを七夕さんへの願い事を集めてくれたり、教員の願い事も集めててくれて、玄関に飾ってくれたりというような、お金がかからないけれども、学校を元気にしてくれる取組をいっぱいしてくれています。そういった取り組みが子どもたちだけでなく、教員にとっても大きな励みになっているという状況です。それから、野洲養護学校は野洲市の小南というところに来て8年が経ちますが、小南の地域の人たちから、ものすごく温かく受け入れていただいております、何か学校の力になれることはないかということで、いつでも協力を惜しまないということで、学校にエールを送ってくださっており、本当にありがたいことだなと思っております。ちょっと特別支援教育の現状と課題からは外れますけれども、やはり学校は学校の力だけで子どもを育てられないなということを強く思いますし、まわりのみなさんの支えがあってこそ、その子らしい社会での活躍の場がつけられていくのだなということを改めて感じました。以上です。

司 会

ありがとうございました。ただいま事務局と校長先生からお話をいただきましたが、今年の3月に策定しました「滋賀のめざす特別支援教育ビジョン」の今後の具体化に向けて今日、議論ができればというふうに考えております。みなさん、どなたからでも結構です。では、発達障害の分野のご専門であります宇野委員の方からもご意見をいただければと思います。

宇 野 委 員

まず、今日このような場をお持ちいただいて、発達障害の医療に関わる者として、大変うれしく思っています。まずは感謝申し上げたいと思います。

発達障害の問題というのは、かなり広範な分野にわたる障害で、日本小児科学会でも、今後の小児医療のメインテーマは小児救急と発達障害であろうと言われて久しいのですが、この疾患の概念というのは、かなり幅広く流動性が高いのです。重度の知的障害の方からアスペルガー、ADHD、LDというような一見軽い方まで、非常に幅広い。重度知的障害の方は生涯にわたり福祉的なサービスの中で保障しなければなりません。ADHDとかアスペルガーの方など、アスペルガーという診断名は新しい診断基準では使用されなくなっているわけですが、まだちょっ

と理解していただくのにわかりやすい言葉なので使わせていただきますが、軽い障害の方というのは、基本的に福祉の枠組みの中で保障すべき対象ではなく、社会的自立を目指すべき方たちです。従って、それぞれが同じ対応でいいということではなくて、インクルーシブのレベルを個別に判断していく必要があるかなと思います。

軽度の発達障害（LD、ADHD、高機能自閉症）の子どもさんに関しましては、みなさんにご理解いただく上で、わかりやすい例えとしては、肥満などの慢性疾患が似ているのではないかなと思います。肥満というのは、遺伝性が非常に高く、正常から明らかな肥満まで連続しておりスペクトラムを形成しています。また、環境調整などの生活の改善をしてあげないと二次障害、例えば糖尿病、高血圧、心筋梗塞や脳血管障害など、命に関わるような二次障害を併発するリスクが高く、早期に対応することによって、健康寿命を伸ばすことができます。発達障害の子どもさんもスペクトラムを形成するすべての人が有する特性であり、環境をきっちりとコントロールすることで二次障害を防ぎ、普通に社会で自立していくことができます。

一方で、肥満の方については、メタボリックシンドロームという概念が提供されて、腹囲が何センチ以上はメタボリックシンドロームとして対応しましょうというようなことで、明確な基準があるのですね。ただ発達障害は、現在バイオロジカルマーカーというのは存在しません。ですから、その子どもさんの認知や適応レベルをそれぞれ見ながら、個別に判断していく必要があるというところが難しいと言えます。教育委員会が策定している就学指導における判断の基準を策定し、エビデンスに基づいた一貫した判断を行うことは、非常に大事な事かなというふうに思います。また、各ライフステージにおいてどういう形で支援していくかについては、国が提示しております教育支援計画というのを具体化していく必要があると思うのですけれども、その際に、誰が判断して、どういうふうな対象の子どもさんを、どういうふうに支援していくかという、策定手順やそのデータベースの整備も行う必要があると思います。インクルーシブをする上で、重い障害の方の完全なインクルーシブは、子どもさんにとってメリットのある形のものでなければなりませんし、学習などの活動に応じて細かく規定することも、今後考えていく課題かなと思います。

最後になりますが、軽度発達障害の子どもさんの対応というのは、基本は、通常級で対応していくべきもので、特別支援学校・学級がベースになるものではないと思っています。特別支援学校がセンター的な役割を果たして、その指導の下で対応するシステムづくりのためには、行政

的にも、特別支援教育室だけの話ではなく、教育委員会全体の問題として進めていくことが、今後の滋賀のインクルーシブ教育を推進する上では、大事なポイントになってくることかなと思います。ちょっととりとめのない話で申し訳ないですが、私からは以上です。

司 会

ありがとうございます。今のお話に対しまして、何かありますでしょうか。

河 上 委 員

先ほど、重森先生から小学部の子どもさんで、なかなかじっと椅子にすわっていれないと、勉強自体は少しずつわかってきているので、余計にじっとしていられないという、そういうお子さんがおられるというふうにお聞きしたのですが、11月21日に教育の日フォーラムというのがありまして、「みんなの学校」という映画を見せていただくことになっているのですが、その「みんなの学校」の本を書かれた、前にその小学校の校長先生をされていた木村先生の本を、「みんなの学校が教えてくれたこと」という本なのですが、読ませていただいたときに、「学校というのは頑丈なスーツケースではダメなんだと。大きな風呂敷にならないとダメなんだ」ということが書いてありました。スーツケースですと、大きなボールは入らないですし、長いものも折らないと入らない。でも、風呂敷でしたら、いろいろな形態を変えることによって、どうにかどんなものでも包み込むことができると。例えば、最初、その風呂敷にはちょっと入らない、尖っているところがあったとしても、その学校自体が風呂敷のように柔軟に変わることによって、またその風呂敷の中にいる教職員や他の生徒さんたちが立ち位置を少し変えることで、どんな多様な子どもさんもそこに入っていけるという、そういう意味だと思うのですけれども、重森先生は、今の小学校、中学校が大きな風呂敷になればその子は小学校にいられるか、そしてそれにはどういうところが現場に必要なのかということと、そういうふうになっていった方がいいのかなというふうにお思いになっているのか、そのあたりをお聞かせいただきたいのですが。

重 森 校 長

平成19年度から特別支援教育ということで、今、宇野先生がおっしゃったように、通常の学級にいる発達障害の子どもたちもきちっと教育の対応をしていきましょうということで、スタートしたわけなのですが、やはり小・中学校でというと、先生方の障害に対する専門性というか、どうしていったらいいかということをはきちっと考えた上での教

育が必要かなと思っています。ただ、そういったことを平成 18 年度までは、そういうことではなく進んできた流れがあるわけですので、そこが急に小学校、中学校の先生にそういった障害特性のある子どもたちに対応してくださいといっても、なかなか難しいとは思いますが。そういつたときに、先ほど宇野先生のお話の中にもありましたように、特別支援学校が地域の学校に対し、特別支援教育のセンター的機能を果たしましょうということを言われておりますので、特別支援学校としても、地域の子どもたち、障害があって行きにくさを感じている子どもたちに対して、どうしていったらいいのかということで悩んでいる子どもたちに対応している先生方にきっちと特別支援学校からの専門性が発揮できたらいいなということを思うのですけれども、なかなか現実的には、特別支援学校にも子どもがおりますので、目の前の忙しさとプラスアルファという部分では、余力というか、本来の力、そこに発揮しなければいけない、そこに発揮しないとなかなか変わっていかないというのは、理解はするのですけれども、難しいです。

司 会

ありがとうございます。他の委員さんは、いかがでしょうか。

佐藤委員

佐藤でございます。ちょうどこの総合教育会議が始まる前に、宇野委員と少しお話をしておりましたのですが、今週から地元の中学校のチャレンジウィークで、子どもさんをお預かりしておまして、今までは、いわゆる普通のお子さんがおられて、非常にニコニコ笑顔で、何を言っても普通に回答が返ってくるというか、コミュニケーションがとれるというお子さんが今まで普通だったのですけれども、今回から、いわゆる特別な支援が必要な、少し発達障害をもったお子さんが入ってこられまして、私は観光業の、いわゆるサービス業をやっているのですけれども、その子とコンタクトをとってコミュニケーションをしようとする、表情が固まって、体も固まってしまっているお子さんでしてね。いったい私どもで何を学んでもらったらいいのかなと考えておりました。それを今まで通りのやり方で普通に今までやってきたとおりに当てはめよう、無理があるのだなということは、その時に感じたのですけれども、宇野先生のお話を聞いていて、ふとヒントをいただいたのが、先ほどからお話のある、障害の質の変化、重複であったり複雑化であったりというね。こうしたことを紐解いていくと、集団という小さくくりの中から、一つひとつの個を見る、一人ひとりの発達の障害のあり方であるとか、生き方の見出し方であるとか、支援の仕方であるとか、そ

ういったものがあるんだなということを、本当に短時間の先生とのお話の中だったのですけれど、今朝の実体験の中でのヒントを感じまして、私どもですとどうしてもお客様がありきで、お客様から見られて、「何だその愛想ない態度は」とかどうとかというようなご指摘があるかと思うのですけれども、そういったことも含めた企業から見た支援の形というのが、本当に必要になって、これが当たり前になってくるべきなのだなと思いました。

今、資料の説明の中で、LD とか ADHD などのお話があったのですが、正直よくわからないので、そういうことを企業にもご説明をいただき、勉強会などをしていただく中で、その障害に応じた一つひとつの対応の仕方というのが、おそらくすぐに発見できるのではないかなと思います。それはやはり企業としていろいろやってきた歴史の中での積み重ねられた、人と個々に対応していく、対話をしていくということが、特にサービス業などではできるのかなという気がしますので、そうすると先ほどの就職のグラフのバランスなども滋賀県ではもう少し変わってくるのではないかなと思います。今の形で受け入れようとする、こういうバランスになるのでしょうかけれど、それを企業側が持っている特性を活かすと、今まで積み重ねてきたものをちょっと変えるだけで、バランスが変えられるような気がしますので、学校教育の、先ほどの河上先生の風呂敷の話ではないのですけれど、企業もそれが風呂敷として広められるのではないかなということを非常に感じました。感想だけで申し訳ありません。

三日月知事

例えば特別支援学校の生徒が、実習に行くとき、この生徒はこういう特性があります、こういう課題・困難がありますということは企業側には伝えているのですか。

重森校長

お伝えした上で受け入れていただいています。

三日月知事

ちなみに中学校のチャレンジウィークでも、それぞれの学校からホテルなどへ行くときは、この子どもはこういう特性があつて、こういう困難があつてというのも、これは伝えているのですか。

学校教育課

もちろんお伝えしております。

三日月知事

伝えてから行くことになるのですね。

学校教育課

はい。

佐藤委員

お伺いしているのですが、だからどういうことをしたらいいのかということがなかなか。

三日月知事

そうですね。

佐藤委員

先ほども、本当に固まっていっちゃって、「今日もお天気がいいから、ニコニコ笑顔でいこうね」なんて言うと、余計に固まられるのですよね。聞き入れられないのだと思うのですが、それを私どものものさしに押し付けるのではなくて、例えば宇野先生におっしゃっていただいたのは、ちょっとその症状が何とかとおっしゃったのですが、例えば、ボディータッチであるとかね。少し距離感を近くするであるとか、その子どもが持つ課題といいますか、これをクリアしようよという目標設定がそれぞれでおそらく違うと思うのですね。

例えば、私どものところに来ている女の子には、忘年会があるので「忘年会のチラシを 100 枚折ろうよ」というように、何時までに 100 枚折ってみるみたいなことで、ちょっと話をして、今日はこちらの会議に出てきたのですが、それが帰ったらどうなっているのかなと思っています。それをみんながいる場所で折るか、一人で一生懸命頑張るか、どっちがいいかと聞いたら、一人でやりたいということだったので、ちょうど私が出てきたので、社長室に今一人でこもって折ってくれていると思うのですが、何かそういうことって普通にお客様に対応するのと同じ考え方で対応できるよねと。それが会社の営みの中に入ってこればいいよねみたいなことを、本当に宇野先生からヒントをいただきました。もし、そのお話を聞かなかったら、おそらく帰って、どうしたものだろう、とにかく笑顔にさせなきゃということを目指してしまっていたと思うので、ヒントになりました。

三日月知事

なるほど。でも、実は今、すごく本質的なことを言っていたいていような気がしています。たまたまその困難な課題を持ったその子に向き合ったら、どうしようかとなるけれど、お客様に対応するつもりでやれば、いろんな知恵の出し方があるのだなと。

実はそういうことって、特別支援学校の児童・生徒だけではなくて、すべての学校の児童生徒に、その子に応じた教え方とか、その子の抱える困難にどう向き合うかということが共通しますね。宇野先生はずっと

個別の教育支援計画をつくって、それがどう小学校から中学校、もしくは1年生から2年生へと共有されていくのかということに尽きる、それを充実させたら、別に特別支援学校でも地域の学校でも同じなのだという考え方なのですよ。

司 会

ありがとうございます。そうしましたら、土井先生、いかがですか。

土井 委員

この特別支援教育の問題は、先ほど、重森校長先生がおっしゃられたように、これまでの流れを変える必要があるということだと思うのです。その際に重要なのは、不安をどのようにして払拭するかということだと思います。子どもたち自身も不安でしょうし、その子たちを抱えている保護者も不安でしょう。地域の学校で学ぶとなれば、担任をされる先生方も不安でしょうし、企業で受け入れることになれば、企業も不安に思っておられる。特別な支援を必要とする子どもを中心に、大きな不安の輪が広がってしまっている。これを何とか解消しなければならないということだと思うのです。

このような不安を解消するためには、やはりまず核となって動く人が必要で、その核となって動く人とそのような不安を抱えている人をどのようにつないでいくかということが、とても大事なのだと思います。それがうまくつながっていけば、これで大丈夫だと皆が安心して、良い方向に回り始めて、普遍的に広がっていくでしょう。そのためにも、今、流れを変えないといけないという時には、まず核を作って、それをつなげていくということが、とても大事なことだろうと思います。

もちろん、最終的には子どもたちの不安が解消されていくことが、一番重要になるでしょう。そのためには、例えば通常級で受け入れていく先生方に、どういう形で子どもたちに接すればいいのかを伝えていく必要がありますし、企業の側には企業の側で、先程来、出ているように、何とかしようと一生懸命な企業が多いけれども、どうしてよいかわからない。企業の側には企業の側のノウハウがあると思いますし、ニーズもあるでしょう。企業の側でこういうことをしてほしいという思いもあるでしょう。学校側には学校側の、やはりノウハウがある。それをどのようにつないでいくか、まさにどうマッチングしていくかという部分が重要になると思うのです。

そのためには、学校同士の連携も重要ですし、企業でもこういう問題についてどう取り組んでいくのかという点について、各企業が抱え込まれるのではなく、企業全体が連携をとってもらって、さらに学校と連携をとっていくという、そういう体制をどう組んでいくかということだと

思います。連携を組んで動き出せば、核となる人たちが潤滑油になって、順調に動いていくと思うのですが、最初に動き出すまでにはかなりエネルギーが必要になると思います。そのエネルギーを集約して、当面どのように取り組んでいくか。教育委員会として取り組まなければならない部分もありますし、知事部局の方で取り組んでいただかなければならない部分もあります。まずはその連携を確立して、とりあえず流れを変える、空気を変える、不安を安心に変えていく、そこがポイントではないかと思います。これは意見ですが。

藤田委員長

先生、大変ありがとうございました。改めて大変勉強になりました。今日の議論を通じて3点ほど、私の思いを述べたいと思います。まず1点目は、保護者の意識が変わってきたとおっしゃいましたが、これは本当に良い意味で変わってきているということを表しているのかと思います。我々の役割としても、障害のある子どもたちをどういうふうに育てていくかというのは大事なことです。一番親身に考えておられるのは保護者だと思います。その保護者の意識が変化してきたということは、たぶん先生方の長年の成果が、学校への信頼に変わっていったのだろうと思うのです。もしその学校への信頼が失われていたら、おそらく保護者の方々の意識はもっと悪い方に変わっていく。良い方に変わっているということは、校長先生のご努力の成果が、保護者に伝わっているのだろうと思います。これが1点目です。これはやはり継続していかないといけない。

2点目は、先ほどおっしゃったように、特別支援教育は非常に幅が広いです。私も現場を視察しましたが、障害者の医療など幅広くあります。医療施設の力が必要ではないかという感じの方から、比較的、社会に出て自立して生活していけそうな方まで、幅が随分ありますね。専門性とノウハウという概念があり、私はノウハウというのは重要だと思います。専門性はそれなりに学習をされていけばどんどん知識が身につきますが、実際ノウハウというのは、障害者の方と添うてみて初めて、ケースバイケースでいろいろなことがわかる。これは自分で体得していくことなのですね。体得していくことがノウハウにつながっていくと思います。そういう点では、先生の資格を取って先生になったというだけではなくて、そのノウハウというのをいかに高めていくかが大事です。まさにインディビジュアルなのですけれど、一人ひとりと寄り添ってみることによって、同じ歳だけれど、同じように見えているけれど、それは違うということを理解できていき、きめ細かな指導、そういうものが

できるのではないかなということが2点目ですね。これは随分、今、成果が少しずつ出てきているような気がします。一つ気になったことは、先ほどのような中で、落ち着かなくて結局授業を放り出して、どこかへ遊びに行ってしまう子どもたちがいる。これは、私の聞き間違いかもしれませんが、学習意欲が出てきている子どもに学習内容があまりに低次元過ぎて、こんなばかりしいのはやってられないと。普通の人にはそれを我慢して、授業だからということで辛抱して1時間なり授業を受けるのですけれど、そのまま遊びに行ってしまうということなのであれば、その子の学習意欲あるいは知的要求力。こういうものをくみ取ってやるということが大事だというような気がいたしました。

最後に3点目の出口でございますけれども、やはり結局最後は、卒業して、いずれ社会に帰属していくような形で、何らかの形で国益に寄与していくということが非常に大事なことだと思います。そういう意味では企業がすべてこれを背負っていけるかどうかということは、私は企業人の一人として思うのですけれど、やはり企業が求められている根本的背景というのは、「我が社は、社会や国から何を求められている会社か」ということを、絶えず問いかけている訳です。多分本日後で発表していただきます二人もそうおっしゃるだろうと思います。それに向かっていながら、企業の業績を上げようというふうに思っていると思います。それは時代とともに変えていかなくてはならない。そう考えると、企業というのは、ある意味では、すべてがインクルーシブなのですよ。と言いながら、どこかですべてがインディビジュアル。それを組織として統合しているだけなのです。組織として統合して、ある理念のもと企業目的に向かって動かしている、そのマネジメントが企業だと思います。そういう意味では、その統合している組織の中にうまくはまる範囲内のところまでだったらいいのだけれど、はまらないところの人材を企業という概念の中だけで全部考えなければいけないというのは、おそらく、どこか無理がでてくる。そうすると、もう少し違う、広い概念の社会組織、今の社会はいろいろな活動の場所がありますから、そういう意味でのソーシャルビジネスというのが、もう少し社会的に生まれてくる必要性はあるのではないかなという気がいたします。これから企業の方からお話を聞けるだろうと思いますけれども、障害者の人たちを一人ひとりの状況において、やはりうまく社会に送り出せるように、保護者の方も、学んでいる本人たちも、百が百、全部がそうできなくても、多くの人がそういうふうに活躍していける、道が開けていくということが大事かなという気がいたしました。以上です。

司 会

ありがとうございました。知事から何かコメントをいただければと。

三日月知事

ありがとうございました。次の議論にも関わるので、もう多くは申し上げませんが、重森校長先生からのお話を聞きながら、私は何かジーンと胸が熱くなりました。ややもすれば、大変だ大変だというお話を伺うのかなと思っていたら、もちろんそういうこともあるのでしょうけれど、それを乗り越えていただいて、保護者の方の協力や頑張りがあって、教員の励みにもなるというお話もありましたし、企業の皆様方のいろいろなご協力があって、学校見学をなされるようになり、企業見学もしてほしいという、この相互のよい関係ができはじめているということも聞きましたので、課題を見れば、きりがありませんけれども、そういううまくいっている事例を取り上げながら、水平展開して、土井先生が言われたように、流れを変えるということを県が核になって、やっていきたい。そして、地域の学校で学べる子どもが、私は特別支援学校で学ぶことも選択肢として否定しませんが、より専門的な支援が、指導が必要な子どもたちに、その教育支援がきちんといくように、地域の学校で学べる子どもは地域の学校で学べる、そういう流れを、まさに特別支援学校が核となって、地域の学校のいろいろなサポートをしていただけるような環境づくりを、これはしっかりと関与しながら、つくっていきたいと思いますので、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

司 会

どうもありがとうございました。まだまだ議論は尽きないと思いますが、またこれにつきましては、ひきつづき教育委員会等で議論を深めながら、また次の施策展開につなげていきたいと思っております。それでは、続きまして、次のテーマ「職業人（産業人材）の育成について」に進ませていただきます。そうしましたら、菊次様、市川様、大変お待たせいたしました。前の方の席にお越しいただけますでしょうか。

6 本県の職業人（産業人材）の育成について

司 会

それでは改めまして本日2名お越しいただいておりますのでご紹介いたします。キャノンマシナリー株式会社から専務取締役経営管理センター所長の菊次 正純（きくつぎ まさずみ）様でございます。もう1名、株式会社市川農場から代表取締役の市川 健治（いちかわ けんじ）様に、お越しいただいております。

それではキャノンマシナリー様からですが、実際に県内の高校生を採用し、育成いただいているお立場から、市川農場様につきましては、脱サラして起業をめざしたきっかけや将来の夢、子どもたちに起業家精神をもってもらうためにはといった視点から、それぞれご発表をいただいた後、皆様に議論いただきたいと思います。

それでは早速ですが、キャノンマシナリーの菊次様、発表をお願いいたします。

キャノンマシナリー
菊次 氏

キャノンマシナリーの菊次と申します。本日はこのような機会を与えていただきありがとうございます。それではお話をさせていただきます。

当社は1972年、43年前に設立をしております。時代背景としては当時、真空管から半導体の世の中になり、真空管関係の機械部門が母体であった当社は先がないということで、今で言う所のリストラが生い立ちでございました。このように自らがエレクトロニクスの技術を使って、外販に出ていこうということで、むしろ苦渋の選択の中で出来たのが始まりでございます。2000年には株式を公開し、2005年にキャノングループ入りし、2010年に100%キャノンの子会社ということになりました。社長は陰山和男、従業員は887名が日本、連結すると1085名ということです。事業内容は自動化・省力化装置、半導体製造器の設計、製造、販売を行っております。日本においては草津を本社として、2008年に守山事業所を作っております。1996年にマレーシア、2003年に大連に現地法人を設立し、事業を展開いたしました。国内の2事業所は、場所的には湖南幹線があり、非常に便利な場所に工場を立地しております。事業としては、メカトロシステム事業、セミコンシステム事業が草津に、CAシステム事業が守山にとあります。守山はキャノングループ内向けの専用工場となっております。

当社のビジョンとしては、「お客様の視点で知的高度生産システム

を創出し、社会への提供・貢献を通し、21世紀に輝き続ける企業の創造を目指す」といったビジョンを持っております。グループに入りましたので、キヤノンの三自の精神としまして、「自発・自治・自覚」ということをベースにしております。また、「創意、誠実、挑戦」、これは今の売上げからすると10分の1くらいの創立から10年くらいの時に、今後発展していこうということで、お客様のニーズに応えていこう、笑顔で、真心でベストを尽くそう、失敗を恐れずにやりましょうということでこの言葉を企業理念として作っております。

扱っているものですが、電子コンポーネント、エネルギー関連、自動車関連、エネルギー関連というのは携帯、パソコン、自動車というのは電気自動車関連の電池、リチウム電池と言われるものを作る装置を作っております。電池そのものを作っている訳ではございません。あと、自動車についてはアンチロックブレーキとか、横揺れ防止をする安全装置の部品を作る設備を作っている訳です。半導体関連については、半導体チップを、高速0.18秒で1個、1分間で330個を接合するダイボンダーという装置を作っており、最近では厚さ25ミクロンのチップを24段積み、厚さ1ミリもないチップを扱う装置を作っております。また、キヤノングループ向け装置は門外不出でございますが、ロボットを使った自動化装置を作っております。

一部新規事業としては、表面改質をするのですが、摩擦係数を10分の1以下に落とすということで、今後自動車や人工関節に使われていくような、表面を加工することが出来る装置を作っております。また、県立体育館が2つある中に、酸素分子が1つという雰囲気を作ることによって、酸素を除去していくという装置を開発しており、色々な分野に活かせるのではないかと作っております。

そうしたものを提供させていただく中で、当社は摺合せ、お客さまから依頼を受けて開発して施工をしていくのだと、そうした中で自らが部品加工をし、図面を見て組み立てていく、そしてお客様に提供する。現場に行って設置をするということで、開発設計する者とのものづくりをする者の間でチームワークでやっていくのだというものづくりへのこだわり、匠の技をもって、先端技術と部品を組みあわせて装置を完成させお客様に提供するのだということです。当社においては「資源は有限ですが、人の知恵と成長は無限である」ということで教えているところでございます。

よく、当社に就職する生徒さんの中に、「滋賀県の企業だから就職するのです」と言う人もいるが、私は必ず言います。「滋賀県発の世界企業なのだ」という話をさせていただきます。そうした中で求める人材ということではありますが、「家族や友人を含めて悲しませることはありませんか」「後ろめたさを感じることはありませんか」 要は、人として、まず社会人であれということです。そして会社を代表する人だということを一人ひとり自覚してくれと言っています。

人には無限の可能性があると私自身はそう言っていますが、みんながそう思うことは非常に難しいのですね。やっぱりぶつかり、こけていく。そうではなくて、七転び八起きの世界なのですね。当社の歴史を振り返るとリーマンショックがあり、IT バブル崩壊があり、遡ればバブル崩壊もあった。その都度でこぼこしながら、みんなで泣きながらと言いますか、笑いながらと言いますか、困難を乗り越えてきたというのが当社の現状なので、そういった意味では自分なりの意見をもって、いろんなことを皆さんから教えていただくこともあるし、自ら学ぶこともあると。だけど、早く一人前になれと言いつつやはりあきらめないで、しかし頑固ではなく、素直に人の意見も聞きましようということです。

あと、学校教育にお願いしたいことは、お願いしたいことと言いつつ実は社内で言っていることで、自らもやらないといけないこととして自分に返ってくるのですが、一歩外に出れば「挨拶、言葉づかい、身だしなみ」ということがベースです。我々自身もなかなか朝から元気を出そうと言いつつ、あいさつが本当にできているか、たまに下を向いていることということもありますが・・・。

あと、当社では入社3年目で海外に行く、草津の製品だと6割くらいが海外に設置しますので実際そのようになります。しかし、何も英語ができないといけないということではありません。偏見を持たずに、どこの国の人ともどんな人とも会話ができることが大事です。だから、こう言っては失礼ですが、英語の点数が問題ではないのです。そういうマインドでやれるかどうかが一番大事です。基礎はしっかり学び、世界レベルを超えていこうということです。ラグビーのワールドカップではありませんが、日本が勝つとは思っていなかったかもしれませんが、やればできるということが一番大事です。どうやったらこのように思うことが出来るか、思うことが出来ればもうこっちの勝

ちかなと思います。

あと、難しい問題を含めて、必死に考えるということ。正しい答えを導き出すよりも、より正しい質問ができるか、遠慮なくということでもあります。早く一人前と言いながらも、七転び八起きで頑張りましたよといいます。「どんなことにもめげないでね」という意味が裏にはあります。メールでも、最近は隣の人ともメールでやりとりするのですね。そうじゃない、人との会話の中でやっていく必要があるのではないかなと思います。それはお願いしたいというより、当社でしっかりやらなければならないと思っています。

学校との連携については、この数年間に毎年 10 数名の生徒に就職いただいております。インターンシップの受け入れについてもこうした状況であります。また、工場見学にも来ていただいております。工場見学についても、当社に就職することが条件だとかいうことはありません。感想文を見ていると、「将来は看護師になりたい、当社に来るわけではないけれども、みな一生懸命あいさつしてくださる。私もチャレンジしていきたい」ということを書いておられます。そのように、いろんな意味でつながりを持ってもらえればと思っておりますので、今後ともよろしく願いいたします。学校において、過去に授業、もしくはご支援をさせてもらっています。当社の宣伝も入っておりますが、こういったことで各地域の学校も含め、勉強させていただければと思っております。以上でございます。

司 会

どうもありがとうございました。いろいろお聞きしたいこともありますが、引き続き市川農場の市川様からの話も聞かせていただき、その後に意見交換をしたいと思います。それでは市川様よろしく願いいたします。

市川農場
市川 氏

みなさんこんにちは。豊郷町で苺の栽培をしております市川農場の市川と申します。今日はよろしくお願いします。

今日は最初の議題で特別支援教育の話がありましたが、実は私どもの商品も、全国の共同作業所連合会さんの方で販売をしていただいております。非常に素敵な仕組みで、クッキーなどを作業所でつくっておられますが、こういったメーカー品を仕入れて販売をして、それで出た利益で作業所向けの製造の機械を、僕の知る例では一升瓶を洗う機械を買

っているのですね。それで、一升瓶を洗う工場で働く人の時給は確か 200 円程度だったと思うのですが、自分たちの商品がそういった形で社会に繋がっているということを今感じまして、私は商売をする上で「縁」が非常に大事だと思っており、本日まさか特別支援の話が聞けると思っていなくて、これも縁だなと思っております。

私ですが、2011 年に脱サラをして苺の栽培を始めております。それで、今仕事がめちゃくちゃ楽しいです。特にこの 2 週間ほどは楽しくて楽しくてられない、寝る間を惜しんでやっているのですが、理由は、間もなく苺が取れるということと、ドレッシングが、キヤノンさんの話にもありましたが、うちも香港とバンクーバーとニューヨーク、シカゴに出ていったところにあります。このドレッシングを始めたきっかけというのは、本当にうちの庭先にぶら下がった玉ねぎから加工品にしていると思ったのがきっかけで、それが今 12 トンくらいまで増えてきました。本当に思いもよらなかったことがビジネスになってきているということです。最初は農業で生活できるかということから始まったのですが、今なんとか 4 年経って生きていますし、4 年前よりも自分は元気になっていますので、なんとか商売が上手くいっているのかなと思っています。本日は自分が脱サラしたきっかけ等をお話しできればと思っています。

時間の都合で略歴は省かせていただいて、起業をめざしたきっかけとしましては、私は小中学校時代に先生から質問はと聞かれると、一番に手を上げるタイプの子どもでした。それが逆に災いをして、サラリーマン時代には、周りとの協調性が自分にないと思うことが多々ありました。息苦しくなってくるのですね。自分でどんどん行きたいのに周りが制止してくるという感じで。そういったことの積み重ねで、サラリーマンをやめて脱サラをしようと思いました。もともと大学の中から商売をしたいと思っていましたが、そうしたことで脱サラをしていったということです。知事もいらっしゃるので僕の夢を申しますと、ドレッシングを全世界に売って行って、苺では滋賀県で一番大きな面積になろうと思っていますので、今日は議題と違いますが、助けていただければと思います。

今日の議題の「子どもに起業精神を持ってもらうためには」ということですが、やはり最初は社長になるという夢が必要かなと思います。僕が非常に記憶に残っているのは、高校の時の適性検査の結果が「庭師」

だったのですね。だから苺はある程度リンクしているのかなとは思いますが、僕が思うのは、そのときに、適性検査の選択肢に経営者があっても良かったのかなと思います。多分そのときは選択肢になかったのではないかと思います。そういうことがあると、早い段階で将来商売をするという自覚が湧くのではないかと思います。

今自分が社長になって、本当に毎日が楽しいです。寝る暇というより、寝ることがもったいないかと思っています。うちが人を雇用してしまうとブラックだと言われてしまうかもしれませんが、正直、創業当初はそんなもんかと思っています。毎日10時間寝て売上げがあがるかと言うと、そうではないと思います。創業当時はしっかりやる必要があると思います。それで、社長になる、お金持ちになるということがスタートですが、今、お金持ちになるという感覚は正直ないのですね。なぜかと言うと、売上げというのは、お客様から頂いた評価だと思うのです。あなたを世間に認めますよという評価だと思うようになりました。だから売上げを上げようと思うには、お客様が求めるものに対してどんどん追求していかなければならないと思うようになりましたので、逆にお金持ちになりたいということは思わなくなりました。それが僕の中で一番大きな変化だと思います。また、サラリーマン時代より生き生きしていますし、性格も穏やかになりました。だから、やっぱり協調性がなかったのかなと思います。こうなったところが、やっと経営者として良かったと思ったタイミングになります。

起業に必要な知識や能力ですが、僕の場合にあってよかったと思うのが、商品とお金の流通の仕組みというのが、前もってサラリーマンをやっていたので、流通を知っていたことが良かったなという部分があります。ただ、これは学校教育の段階で流通の仕組みを教えておけば、もっと早い段階から起業をめざす方が増えるのではないかと思います。次に観察力と直観力と実行力、そして今自分が一番直面しているのがこの継続力です。これが一番パワーがいるのですね。去年買ってもらったお客様が今年も継続して買ってもらえるかという、去年より良い苺を作って初めて来てくれるということになるので、継続していく力は重要だと思います。

あと、商売していく中で、どんな経営者でもそうですが、苦しいことはたくさんあると思います。しかし、僕は苦しいことの後には絶対楽しいことがあると思っているので、そのサイクルをいかに早く、楽しい

ことをいかに早く手繰り寄せるかというところが経営者として一番大事なことだと思っています。楽しいことがすぐ1、2時間後にあれば苦しいことは忘れると思うのですね。このサイクルをいかに早くするか、それが経営者のパワーだと思います。

次に、自分が商売してから気づいたこと、これは絶対お伝えしたいと思っているのが、新しいことを始めるに当たって、知識と経験はかえって邪魔をすることがあるのです。僕は苺の栽培も何も教えてもらっていません。ぶつつけ本番で栽培を始めて、県の指導員が実際にやりながら教えますということでした。逆に知らないからこそスポンジのようにたくさん吸収できましたし、質問も、市川さんの質問はちょっと違う、鋭いところを突いてくると言われました。だからやっぱり素人発想は大事だと思いましたし、自分の商売に当たり気を付けているのが、既成概念にとらわれないことを心掛けています。なぜなぜ？からすべて始める。例えば病院に行けば待ち時間がすごくありますよね。僕が病院を経営するなら、この待ち時間をなくすことから努力します。このようになぜなぜをしっかりと持てるかどうか、普段の日常の疑問点が商売につながっていると思うので、なぜなぜを見つけ出す。例えば学生さんだと自分で見つけられないかもしれないので、そういったことは大人が手助けすれば進歩していくのかなと思っています。知らないことは最大の武器だと思います。

では学校教育にどのようなことが求められるかということですが、先ほどキヤノンさんにもありましたが、サラリーマンはやはり素直さだと思います。そこが経営者になると素直さの中に頑固さが必要だと思います。なぜかという、経営者になるといろんな人が色々な意見を言ってきます。10人いれば10人の意見が全部バラバラで返ってきます。その人たちの意見に従って実行したら、その責任を取ってくれるかと言うと、当然取ってくれないので、責任はすべて行動した人にあります。ということでやはり自分のポリシーをある程度貫いていかないといいと思います。また、最近よく思いますが、うちにも農業研修に来ますが、30歳40歳でも挨拶ができない人が多いのですね。「今日は教えてもらってありがとうございました。」と素直に言えない人が多い。やはりあいさつは正直、社会の基本です。昔は農業というとぶっきらぼうなおじいちゃんがやっているイメージだったかもしれませんが、今はそれでは農業は勝てないのですね。農業もサービス業になってきている

ので、あいさつをしっかりとできるかどうか。次は、うちも海外はまだまだ新参者ですが、日本は人口減少になってくるので、しっかりと海外マーケットに視野を向けていくことが大切です。うちは日本国内でも某企業さんなど大規模な取引をさせていただいておりますが、先日シカゴからきた発注はその倍くらいの発注が来るのですね。やはり人口が違うのでそれだけマーケットが大きいです。そうなってくるともっともっと面白くなってくるので、海外に視野を向けることが大切だと思います。

あとは積極性と向上心です。僕は失敗してもくよくよししないですね。くよくよしていたらそれだけで会社の経営は終わってしまいます。とにかく失敗しても忘れたらいいです。人間はすごくいい武器を持っていて、忘れるということが出来るのですね。それを有効活用して、嫌なこと、失敗したことは忘れたらいいです。ただ、失敗の中で学んだことを、例えば売れる商品には理由があると言われますが、逆に売れなかった商品にも理由があるのですね。例えばラベルの表示が悪かったとか。それをつきとめる努力、これが向上心だと思います。売れなかったからといってシュンとしているよりも、なぜこれが売れなかったかということを探求していく力が非常に大事だと思います。

10 分の時間ですので最後になりますが、僕は 2011 年 3 月に脱サラをして、すべての貯金がなくなりました。さらに借金を背負って、なおかつ苺は悪魔の作物で、植えてから 9 か月間お金を生み出さないのですね。この間、人生で初めて無収入を経験しました。実はこの経験が非常に大きいのですね。一番初めに買ってもらったお客さんに対して、本当に心の底から「ありがとうございました」という言葉が出ました。社会に出て 10 数年たって初めて心の底からありがとうございましたと言えたと思いました。これが経営者として味わった一番良いことだと思いますので、事業主を育てるということは、心の底からありがとうございますという人材を育てることだと思います。1 人でも多く滋賀県から輩出できればと思いますので、教育の場でもお力を貸していただければと思います。また、先ほどの、なぜなぜ？ということですが、これは僕が小学校の頃の先生で、廣瀬先生という、結構異端児な先生でしたが、理科の実験の時に必ず答えを 4 つ出しておくのですね。それに対して生徒がディスカッションをするという方式を取っておられました。それが僕が人生において影響を受けている、今でも覚えていることです。積極的にディスカッションをする、そこでみんなで答えを導き出す。そして先

生がいつも言っておられたのは、「多数決で出た答えが必ずしも正解ではないのだぞ」と言っておられました。そういった小学校の頃の教育が、今社会人になって改めてよかったなと思うことがありますので、それを担っておられるみなさんが滋賀の子どもたちが明るく、そして商売に向く人材を育てていただければと思いますのでよろしく願いいたします。最後は宣伝ですので、お時間がありましたらまたご覧ください。ありがとうございました。

司 会 ありがとうございました。お二人の話は我々だけでなく、子どもたちにも聞かせたい話でした。市川さんの商品については、後ろにパンフレットも貼ってありますし、本日ドレッシングもお持ちいただいておりますのでご覧ください。

それではここは委員長の分野ということではいかがでしょうか？

藤田委員長 今日は大変ご多忙の中貴重なお話を聞かせていただきましてありがとうございます。私も企業人の一人として大変うれしく思いますし、こういう場を通じて、実際の経済界の躍動感を人材育成につなげていければと思いました。

まずキヤノンさんのお話をお聞きしたのですが、おっしゃっていることはまさにそのとおりで、ものづくりでリードなさっていますが、ものづくりも人づくりも共通しているところがあり、人づくりの基礎的なお話は全く同感でございます。教育に求めるというところで、学力や知識は高校を卒業しているのだから、一定レベルは身につけているという前提があると思うのです。その上であいさつができるとか、3年経ったら海外に行かせて好奇心が旺盛だとか、そういう人たちを長い時間をかけて企業として育てていただいていると思います。

また、市川さんについては、これで日本の **TPP** は安心だという気がしました。ややもすると大変不安なところもありますが、この時代変化をネガティブではなくポジティブに捉えながら、クリアしていくのだという起業家精神で、元来の素地が高いものと思います。全ての子どもたちが将来起業できるかは別ですが、重要なことは、日本全体で見ますと、廃業率と起業率のバランスが崩れていつているのですね。廃業する人は後継者がいなかったり、あるいは新興の企業に負けて廃業するのですが、廃業の数が増えるということは、日本としては一方で国益を支える新し

い産業が出てこないといけないのですね。そういう意味では市川さんという方が日本中に出てくると起業率が上がりますから、いいのになという思いで聞いておりました。

質問ですが、市川さんのところは何人の従業員でやっておられるのですか。

市川農場
市川 氏

ほとんど家族経営です。私と家族とたまにアルバイトが1人2人とあったところです。

藤田委員長

1つ大事だなと思っていたのが、企業だとなかなか組織に縛られて自分の力が発揮できない、不満がたまるという話がありました。やがて会社が成長していくと自分が採用していかないといけないので、自分が窮屈だと思っていた組織を自分で作っていかないとはいけません。その時に経験してきた組織力というものが次に活かされればその組織はいいものになると思うのですね。このまま成長していくと従業員が30人、50人と、やがて組織力を出さざるを得なくなりますので、そういう時に活かしていただきたいなと思います。

それを培ってきたのは市川さんの心の強さがあると思います。成長すると色々と困難もありますので、そういうことを乗り越えるのも人材だと思いますね。私たち教育委員会としては、今後もそういう人たちを日本のために盛んに送り出していけるだろうかということを考えると、良い見本があるといいので、最初はお金持ちになりたいとか、親を楽しませてやりたいとかいう気持ちから入っていけばよいのですが、やがて本物志向になり、あの人すごいな、ああいう人になってみたいというくらいに、是非そういうモデルになっていただければと思います。他にも意見はありますが、時間があればまた発言いたします。

司 会

ありがとうございました。教育長はいかがでしょう。

河原教育長

ありがとうございました。教育は子どもたちをどのように育てるべきかということを考えさせていただきました。

どうしても今の時代、学校教育が知識を中心に教えているのですが、いわゆる感謝をする、ありがとうと言える、「おはようございます」も「ありがとう」とつながると思いますが、そういうことが大事だと言っ

ておられました。また、お二人とももう1つ、失敗から、失敗が実は力になるということをおっしゃいました。この教育の中に、正解を求めるということがありますが、それは生きていくということにはつながらなくて、失敗を力に換えるとか、ありがたいと言えることが重要なのだと思いました。

先ほどの特別支援教育でもありましたが、その子の存在を認め、その存在を生き生きとさせるということは、特別支援教育も一緒なのかと思います。そのことを教育としてしっかり伝えていかないといけないのかなと思いました。

最近の若者、または学校を見ていただいて、企業の立場からどのように感じていただいているか、先ほどいくつか言っていたきましたが、他にありましたら教えていただけないでしょうか。

キャノンマ
シナリー
菊次 氏

先ほども申しましたが、自分の力は無限なのだというのを、私も口では言っておりますが、自分自身も本当に心から思っているかな？と。そう心から思える子は少々なことではめげないですね。実習中にこんな難しいことはできませんといって下を向いている子がいるのですが、入って数か月、1年くらいで出来なくてもどうってことないのです。挫折をしろということではなくて、やったらできるぞと、ただ今はやっていないだけだと思う心で十分ではないかと思います。これは新入社員だけでなく、意外と成長してきた一人前の人であってもお客さんに怒られるとしょぼんとしているのですね。なんてことはない。次にしっかりと貢献すればいいのだ、トータルでお返しすればいいのだという気持ちで、やればできると心から思えるというか、そういうことを持っていればいいと思います。

司 会

市川さんはいかがでしょう。

市川農場
市川 氏

私は豊郷町ですので、豊日中学校なのですが、こう言っては悪いのですが、僕の頃は本当にスクールウォーズのようでした。今日、こういう場に来たということは先生も喜んでくれているのかなと思うのですが、ああいった環境があったから今があるのかなとも思います。それは嫌なこともありました。生徒会室に行ったらシンナーくさいとかありましたし、僕らは授業はうるさいものだと思っていましたが、高校に行ったら授業は静かだったのですね。そういった環境で中学校3年間過ご

してきたのは、学歴が必要だと言われると僕は3流大学出ですから、東京に行って東京大学や一橋大学の人との宴会に行くと大学名を言うの嫌やなあと思いますが、中学校の時のあのパワーは逆によかったのかなとも思います。結果を恐れずにやっていければすべてはいいのかなと思いますし、逆境とピンチはどんな時でもありますよね。そこをしっかりと乗り越えていける力と乗り越える方法を示してあげれば、必ず上を向いてくると思います。僕は「棚からぼた餅」という言葉が好きで、あれは棚の下まで行っているからぼた餅が落ちてくるのですよね。そこまで行く努力というのは極めて大事なのですよね。これをバイヤーに言うと、「お前あほか、おもしろいなあ」と言われるのですが。やはりそういったところの柔軟さというか、言葉のやり取りがしっかりとできればいいと思います。

あと、僕は東京に頻繁に営業に行くので思うのですが、東京の高校生はすごくおとなしいというか、大人びている感じがしますね。逆に琵琶湖線に乗ると、高校生が4人で足投げ出して座っているという光景を見ます。将来的に社会に出た時にはそういう東京の人たちと一緒に仕事をするわけなので、そういうマナーは大人がしっかり教えてあげないといけないのかなと思うことが多々あります。特に東京に行くと、ピシッとした制服を着た人が列をなして歩いている姿を見ますし、方や琵琶湖線に乗ると「〇〇高校」と書かれたバッグを担いで4人席でぺちやくちゃしゃべっている場面を見ると、滋賀県はやっぱり田舎かなと思うことがあります。公共的なマナーをしっかり教えてあげるのは大人の役目かなと思いますし、そういったところを改善していくと滋賀県はいいなとなってくると思います。ちょっと前に滋賀県の知名度のニュースがありましたが、実際に低いと思いますが、低いなら低いなりに上げていく努力をすればいいだけなので、そういったところで滋賀県に来た人が電車に乗ったときに気持ち良く乗っていただけるように、大人でも子どもでも一緒ですので、大人が教えてあげることが大事だと思います。

司 会

せっかくの機会ですので他の委員さんはいかがでしょう。

土井 委員

本日は貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。私は学問の世界で生きていますので、企業のお話を大変興味深く聞かせていただきました。

とはいえ、本日お話をいただいたことはよくわかるところがございま

す。といいますのも、企業で色々な開発をし、また新しい課題に挑戦していられることも、学者として新しい問題に挑戦していくことも似たようなところがございます。つまり、共に答えがわかっていないことに挑戦することに意義があるわけです。実は、高校生みなさんが大学に入ってから、私が一生懸命考えている問題を授業で話しますと、「先生早く答えを教えてください」と言われることがあります。しかし、今話していることは、私が今考えている問題であって、答えがわからないから一緒に考えようと言っているのではないかと言うことがあります。こうした意識のギャップが大きいのではないかと思います。それに大学の段階で気づくのか、大学でも気づかず、社会に出てから気づくのかという問題があるのだろうかと感じました。

もう1つ、大学の教育にも問題があると思っていますが、学校教育は子どもたち一人ひとりのスペックを高めることに集中しているところがあります。一人ひとりの能力を高める、資質を高めることをやっているのですが、社会に出れば、結局チームを組んで、個人の能力をつなげて活用することで、より大きなことを実現していかなければなりません。そうすることによって、自分が持っているスペックよりもはるかに大きなことが実現出来るわけですが、そのチームとして協力していく部分の教育が今は十分出来ていないのではないかと思います。先ほど、象徴的にあいさつのことをおっしゃいましたが、他人と一緒に初めて大きな力を生み出せるのだから、他人を尊重しないといけないということだと思うのです。他人と一緒にどうすればうまくやっていくことができるのか、そのような教育を高校でも大学でも十分できていないのかなと感じました。

そこで、こうした点をどのような形で教育に取り込んでいけばいいか、どのようなプログラムを組んでいけばよいかということについて、何かアイデアがあれば伺いたいのですがいかがでしょうか。

キャノンマ
シナリー
菊次 氏

難しいですね。

藤田委員長

では考えていただいている間に他の人の意見を。その間に考えていただいて。

河上委員

お二人の話を聞かせていただいて、本当に当たり前のことがあたりまえに出来て、その上に色々なものが積みあがっていくということをつく

づく実感いたしました。あいさつやマナーがありましたが、本当は取り立てて言うことではないが、それができてこその他のことが、特に市川さんにおかれてはいろんな状況を全部力に変えていくということで、大変勇気をいただきました。

1つ菊次さんに伺いたいのですが、離職をする人もいると思いますが、どういう理由が一番の理由だとお考えでしょうか。

キャノンマ
シナリー
菊次 氏

先ほどの資料で、5年間で数十名入ってきていますが、離職したのが2名います。高校生だけでなく大学生もそうですが、先ほども言いましたが、1年間の実習をしている最中に難しすぎて自分ではできないのでやめますという人が1人、もう1人は、もともと働いていこうという意識の希薄さがあったのでしょうか。自分がやりたいことが見つからず、会社に入って余計に混乱してきたのでやめますということでした。ただ、他は全然やめないのかというとそうではなく、やはり色々なことで悩み、メンタルなども実際にはいるので、いいことばかり言っているようですが、社内では人権やお互いを思いやるということ、パワハラ、セクハラやモラハラも含めてしっかりやっていないと組織が崩れてしまうと考えています。

河上委員

これだけの数の社員がおられて、離職した人の少なさにびっくりしたのですが、やはりいろんなものを抱えている人がいても継続して力を発揮してもらえるように育てていただいているのだと思います。

キャノンマ
シナリー
菊次 氏

反対にいていただいているのかもしれませんが。

先ほどのチームワークをどう育てるのかということで、実際には職場でいろいろ考えながらやっているのだと思いますが、入ってきたときにモラル研修ということをやります。これは語弊があるといけないのですが、軍隊式のように、起立、礼というように女性も含めて大きな声を出すというものです。皆最初は恥ずかしくて赤い顔をしています。大きな声を出して最後は頑張るぞというところまでいきます。その後、フィールド研修ということで外に出てチームで活動します。自分が出来たらいいということではなく、みんなが一緒になってクリアしていかないとはいけません。ものづくりもやってもらいますが、一人では作りません。この人はソフトができる、この人は加工ができるというように、分担して簡単な機械をチームで作ってもらっています。そしてその日に学んだことを3分間のスピーチをしてもらうということを毎日続けていく。そ

れはここが良かったねという「○」付けはするが、それが何かの評価になるということでは一切なく、共同作業をやるという実習をする、あとは組織の中で OJT をするという研修をしております。

河上委員

今、チームでというお話がありましたが、学校でも担任だけが抱えてしまっているということがあります。改めてチームで、組織で動いて、その人の足りないところを補ったり、リーダーとなる人が出てきてチームをまとめたりだとかいう大切なことをお聞かせいただいたと思います。ありがとうございます。

宇野委員

今日はありがとうございます。

実は、私は 2002 年ぐらいに県の産業支援プラザの S O H O に教育ソフトの開発というベンチャー企業を立ち上げてお世話になったことがあります。その時にいろんなベンチャーの方を間近に見せていただいたのですが、そういう方たちで生き残っておられる方というのはすごく少ないのですよね。そういう人たちは非常にコミュニケーション能力が高く、礼儀正しい方が多いかなという印象を持ちました。今日改めてこういうお話をお聞きして、やはりそうだなと思いました。教育委員会という教育だけではなくて、お祭りとか観光の振興に関係することも業務に含まれているのです。ビジネスに関することとなるとどうしても私たちは頭が固いので、常識的な事を真面目にコツコツすることには慣れているのですが、多分それでは京都や奈良とか近隣の府県と差別化を図ることはなかなか難しいなと思うのですね。ですから非常のことを、言い方は悪いですが不真面目にやるという視点も大事だなと思ったりするのですけれども、そういったところでベンチャースピリッツみたいなものを県の行政でも取り入れていく必要があるかなと思っています。その辺に関しまして市川様から、こういう風にしたらもっと地域が振興できるのではないかというご提案などありましたらお聞かせ願いたいな思います。

市川農場
市川氏

まず、ベンチャースピリットというものを僕が社会に出て一番初めに教えられたのは、仕事はつらいものだ、つらいから給料が出るのだと教えられた経緯があるのですけれども、実際それではちょっと持たないかなと思います。正直、仕事は逆に楽しいものだというふうにしていかないとだめだと思いますね。例えば、人生の最初の 20 年は親のお世話になって、40 年は自分で仕事で稼いで、残り 20 年はまた助けてもらうという流れの中で、その一番長い 40 年のところをいかに楽しくバイタ

リティあふれてやっていくかということが大切で、仕事は自分で選択できますので、嫌いなことは避けていくということが一つの方法かなと思ったりしています。

ただ、普通にサラリーマンをしていると嫌な仕事をもちろんやらなきゃいけないとは思いますが、先ほどお伝えしたとおり、結果は何かは必ずあるのですよね。それは失敗であり成功であったりしますが、それは結果なのでそれを手繰り寄せてくるプロセスが、僕は今苺を作っていて一番面白いですね。やって、失敗して、もう無収入になると思ったこともあったのですが、そこをチャレンジする力というのがやはり大事だというふうに思いますね。

宇野 委員

苺とかドレッシングとかは普通にある素材、商品ですよね。そこがどのように世の中に支持されるというのは、どのあたりで差別化などを図っておられるのですか。

市川農場
市川 氏

これはよく言われるのが、うちは滋賀県の豊郷なので、滋賀で一番小さな町、豊郷。そこをだんだん読み砕いて行って「豊かな郷」と書くのですね、豊郷って。そこを農業にしっかりと引っ付けて行って、それでオンリーワンの商品にしたということだと思います。玉ねぎドレッシングは日本中どこにでもあります、滋賀の一番小さい町豊郷の農家が育てた玉ねぎドレッシングで、その豊郷は「豊かな郷」という文字を書きますよ。僕は最初、豊郷町吉田というところに住んでいるのですが、もっとマーケットを小さく吉田としようと思ったのです。歴史を調べたのですが、「田んぼが良い」と書くので、そうしたらやはりかつては皇室に献上したとかといった歴史を知ったということもあるので、やはり何かをやるときには自分で肉付けしながらオンリーワンに持っていくということが大事かなというふうに思います。オンリーワンになった瞬間から競争相手はなくなるので、そこは一番目をつけていたところかなと思います。

三日月 知事

豊かな郷、良い田んぼでできた玉ねぎドレッシングといっても、それでも競争相手は多いのではないですか。

市川農場
市川 氏

そうですね、多いですね。

三日月知事

それでもニューヨーク市場などあちこちで買ってもらえるようになってきたというのは何か他にあるのではないですか。

市川農場
市川 氏

これは自惚れと言われるかもしれませんが、自分が動いたからではないかと思います。待っててもお客さんは来ないのですね。展示会へ行ったりするなかで、私は先ほど申し上げたとおり一番に手をあげるタイプですので、バイヤーにもしっかり噛みつきます。噛みつき過ぎて喧嘩になったこともあります。その時にとっさに出たのが、商談という言葉は商いの言葉に火、火と書く。だからぶつかり合って当然じゃないですかとバイヤーに言ったら、なるほどと仲直りしたのです。それが覚えてもらう秘訣なのですね。バイヤーは一日に四十社、五十社と商談するので、誰を覚えるかというインパクトのある人間を覚えるのです。それで、最終的に、棚割りと言って棚に入れるのに悩むときに、商品と市川の顔が浮かんだと言われました。これで断ったらあいつ何か言って来るなということで入れたと言われました。最終的には、これは自惚れと言われるかもしれませんが、自分のセールス能力と負けん気の強さかなと思います。

競争相手はいっぱいいますよ。あるとき、他のメーカーから、「お金を出すから市川さんは降りてくれ」と言われたこともありました。本当にそういう世界なのですけど、「絶対に負けません」とはっきり言いますね。

藤田委員長

それはいいことですね。

市川農場
市川 氏

お金が絡んでくる世界なので、そこでどう負けないかというところだと思います。

藤田委員長

キヤノンさんは、昔はNECマシナリーで、社長さんにはずいぶんお世話になりました。ありがとうございました。

それは置いておいて、両者に共通しているところが一つあります。それは私の会社も一緒ですが、基本的に企業という組織で動いているキヤノンさんと、それともう一つ起業家として業を起こしてきている市川さんのところとでは若干入れる力が違うかもしれませんが、市川さんのところも今後成長していけばやがては30人の会社、50人の会社、

100人の会社と成長していく一つのプロセスのビジョンはおありだ
と思うのです。その段階で組織というのが重要になってくるのだと思
います。ただ共通していることは、私の会社でも同じですが、まず一人前
になろうと努力するわけです。一人前になると、それまでは新入社員で
もそうですけれども、一人前になるまではいろんな先輩が積極的にいろ
んなことを指導してくれるのですが、一人前になるとあまり言われな
くなるのですね。本人がこれは出来るだろうと。問題はそこからですね。
今菊次さんがおっしゃったとおりですが、無限の人間性を引き出そうと
すると、マズローの言っている自己実現に近づこうとすると、自分にで
きる最高の自分をつくりだす必要があります。そこには8時間の勤務と
かは関係がありません。市川さんは自分のできる最高の自分をつくりだ
そうとしているわけです。

だから一人前で終わるのならそれでいいのです。それであれば勤務時
間どおりしていただければいいのです。本当に自分でできる最高の自分をつ
くりだしたいという意欲が高まると、不眠不休で考えますね。そういう人
たちが最後には、自分の能力の無限というものを追求していく、全部が
できるかどうかは別ですよ。それが多分自己実現に近づくということだ
と思うのですね。

そういうことを考えていくと、私も起業家と言われる人とたくさん触
れあってきましたが、特に渋谷がビットバレーと言われて、ホリエモン
の盛んな時代です。いろんな人に出会いました。中には技術は最高なの
ですが、この人間では無理だなと思うことがあります。ものすごい技術
で、世界に絶対打って出られる技術でも、扱っている人間によって、こ
れは駄目という感じがする時が、直感的にあるのです。

だから結局は技術とかではなくて、それを取り扱っていく人間が非常
に重要な要素で、先ほどおっしゃっていたように、無限の能力があるの
ではないですかと。無限の能力を、できたらわが社で発揮してほしいと
いうことをキヤノンさんはおっしゃっておられる。そのことはどの企業
も一緒なのですね。

先程起業家精神ということがありましたが、多分起業家精神は、例え
ば市川さんの地域とか、農業にかける思い、その、いわばバックグラウ
ンドが自分を動かしているのだと思うのですね。結局そういうバックグ
ラウンドを重く捉える深い心があるのですよ、市川さんには。なければ
絶対に出来ません。それがあってこそできているのですね。

そういうところを教育の中にどう組み込んでいくかということがポイントで、やっぱり、継続は力なりですね。粘りでいくことを教える。そういうことを自らが展開していくことによってうまくいきますね。起業家にふさわしい技術や知識は日本にもいっぱいありますが、それがなぜシリコンバレーと違うのか。シリコンバレーに行ってみて感じるのは、自分の技術に惚れ込んで、これでとにかくアメリカンドリームを実現しようと努力する。そのリスクを自らとる力がシリコンバレーにはあるのですね。今おっしゃったように、自分の技術を与えていこうと。また、そのリスクを買う人もいるのですね。お前のアイデアいいから俺買うわ。1億出すわ、というように。日本は大体リスクから逃げる人ばかりです。日本人はリスクから逃げたくなる。そこが少し違いますね。それを共有して買う人がいる。今度はそれをマーケットに出すために、新しくそれに賛同する人がいる。いろいろな新しいものがシリコンバレーから出てくる背景がそこにあります。でも日本も負けていてはいけないので。その意味で市川さんみたいにT P Pの時代を受けて、それをウエルカムだ。それを乗り越えていこうとする人たちがいっぱい出てくることはよいことだと思います。玉ねぎだと淡路島が全国的に有名だと思いますが、いかがですか。

市川農場
市川 氏

逆によかったのは淡路島があったから、僕は西に向かわなかったのです。東に向いたのですね。東に向いたのがよかったのです。だからもっと東に行ってニューヨークに行ったと。

藤田委員長

なるほど、通り越してね。素晴らしいことです。いち早く起業家としてグローバルを実践されているということですよ。日本は今、少子化でどんどん陳腐化しているマーケットの中でどうしてもグローバル化をやらざるを得ない。経済産業省や農林水産省よりも早く目をつけてグローバルに行っているということはすごいことです。

そういう人材にアピールしてもらって、あなたは玉ねぎで行ったけど、私はこれで行こうと、いろんなことが刺激になり、発奮すれば将来の日本は楽しみだなという気になりましたので、ぜひ頑張ってくださいなと思います。

佐藤委員

お二人の話を聞いていて、私も企業人だなと思って。特に市川さんは

同じことを言っておられると。「棚ぼた」の話とか、私もいつもよく言っていると思いました。みんなで一緒にやりましょう、一所懸命よくしていこうと言いながらも、お商売人さんはライバル、親しき仲にも礼儀ありの中でのライバルということがあるので、そういう競争心と、教育で人を育ていこうという優しさ、愛情の部分とがマッチングしていくということこそが知事がいつもおっしゃっている「滋賀らしい教育」「滋賀らしさ」なのだなということをすごく感じました。

やはり元気で明るい人と話しているといろいろと知恵が湧いてきますよね。何かできるよねって。いろいろと課題があっても、それはそれで何を言われても、あとでちゃんと知事が聞いて下さる。それこそ一緒にやっていきましょうというのが、ここはここの専門分野で、これは僕がやるよ、ではここは私がという、そういうことが非常にできそうというか、出来るのではないかなと思いました。非常に簡単な、シンプルな当たり前のことをしていけばいいだけだなということが、何か問題解決の大きな糸口なのかなと改めて感じさせていただきました。感想で申し訳ありません。ありがとうございました。

司 会

ありがとうございました。そうしましたら知事の方から。

三日月知事

ありがとうございました。やっぱりこの総合教育会議、僕は好きですね。やってよかったなと思いました。来ていただいてよかったなと思いました。本当にありがとうございました。

今日のお二人のプレゼンテーションをビデオで撮っているのです。これを使わせてもらってもいいですか、学校等で。お二人の講演を聞いていて学校でまた話してもらえたらいいなとか、中学校、また母校に呼ばれることもあるかもしれませんけれども、そうしたら自分の学校の卒業生にあんなことをしている人がいる、またそれを目指そうとする人がいたり、キヤノンマシナリーさんで働いている人がまた母校に帰って、僕はインターンシップや実習をして会社に入って、こんな会社で働いているということで、また、あの先輩と一緒に働きたいなと思ってもらえるような、そんなスパイラルをぜひ作っていききたいなということを思いました。

お二人に共通していたのはあいさつと、あと世界、海外に目を向ける、何も語学、言葉じゃなくて、偏見を持たずに付き合い、そして商いができるというか。そして臆することなくチャレンジしたらいい。失敗してもあきらめなかったらいつか何とかなる。やればできるということ。で

もこんなことって、実は僕らが県庁で働いていても、また県議会で指摘されるかもしれない、県民のみなさんからいろいろ言われるかもしれないということですが、「滋賀県は知名度が低いではないか」「いやいや、だから伸びしろがあるんです」、「また学力テストの正答率が悪かったではないか」「いやこれからです」といった、気の持ちようで随分変わるなということを改めて教えていただいたので、また今日たくさんのメンバーに聞いていただいて、他にも質問したいなという人もたくさんいると思うのですが、今日ご示唆頂いたことを噛みしめながら一緒に頑張っていきたいと思いますので、これからどうぞよろしくお願い致します。ありがとうございました。

司 会

長時間ありがとうございました。第1回で就学前教育、第2回で塾、第3回で放課後、第4回で学ぶ力、そして今日の第5回で職業人あるいは特別支援教育ということで、特別支援教育では支援する、手を差し伸べるというイメージではなくて、共に生きていく、共に働いて共に暮らしていく、そういったことがたくさんあって、この会議も回を重ねるごとに盛り上がってきていると思っております。ぜひ今後も、今日来ていただきました菊次様、市川様におかれましては、私ども教育委員会、あるいは滋賀県の職員とお付き合いいただきながら御教示いただければと思っております。次回は年明けの2月頃に第6回を開催したいと考えております。内容については、また追って詰めさせていただきたいと考えております。

また、先ほどお話にもありましたが、11月21日に滋賀 教育の日フォーラムをさせていただきます。まさに「共に育つ滋賀の教育」ということで、大阪の大空小学校が「みんなの学校」という学校ですが、不登校ゼロで、共に生きる、特別支援学級をつくらないということで支援が必要な子どもも同じクラスで学ばせようと、その校長先生がされたことをみんなで学ばせていただくということで思っておりますので、ぜひ職員の方々も参加いただければと思っておりますが、但し今、もうすでにいっぱいになってきております。映画の方はまだお席があるのですが、この後どうお断りしようかと悩んでいるところでございます。そういったことで、またぜひみんなで考えていきたいと思っております。これで第5回総合教育会議を終了したいと思います。どうもありがとうございました。

(終了)